法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

『緋文字』理解の可能性

井坂，義雄

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
103
(開始ページ / Start Page)
25
(終了ページ / End Page)
31
(発行年 / Year)
1998-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004615

Hosei University Repository

『緋文字』理解の可能性

井 坂 義 雄

(1)

全体の構成を鳥瞰すると，短いことが特徴と言えるホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の『緋文字』（*The Scarlet Letter*）第1章「獄舎の門」[1]（The Prison-Door）の冒頭に，一群の市民が集まっている情景が描写されている。この情景は，しかし，建物の扉を描き出したところで急に切れてしまい，描写ではなくて説明，すなわち，ユートピア，墓地，牢獄，バラが提示され，物思わしげな語りが続いていく。作者は，ドラマを作り出そうとしていた自分をふたたび思い起こしたとでもいうように，第2章「広場」（The Market-Place）では，第1章と同じように，一群の市民が集まっているところから描写を始めている。

このあとには，描写と説明が渾然一体となっている語りが続いていく。

作者は，なぜ劇の台本のように登場人物に語らせ，行動させることに専念しなかったのだろうか。なぜ作者は語らなければならなかったのか。ここには，芸術家の審美的意図として片づけることのできない問題があるように思える。この冒頭の数ページに，思想が，作者の意図とは同列には論じられない，いわば真正な思想が潜在していると見当をつけることはできないだろうか。ためらいと同時に断定が隠れていて，すでにある概念や概念の体系ではない未知の何かが今の時代につながっていないのだろうか。[2]

解釈の多様性と，おのおのの解釈の妥当性という点で，『緋文字』に関する研究を概観すると，なにかが欠落し，ある種の混乱があるように見受けられる。二つの理由が考えられる。一つは作品の構造と，その周辺から起こる。もう一つは，読者や評者の側の変化と流動性の問題。この二つの間に大きな可能性があるように思われる。

Hosei University Repository

(2)

語り（narration）の意味と重要性については，すでに多くの識者が論考している。[3] 語り手（narrator or narrative persona）は，作品の全体を通じて，話の筋と舞台裏の進行を読者に説明し，解説する。とりわけ第24章「結び」（Conclusion）は，語り手によって語られており，読者の心を魅了してやまない墓標の文字も，語り手の形容つきの言葉に組み込まれている。作品を内側から支える内部構造のかなめとしての，この語り，および語り手の存在は，もう一つの「ためらい」の形式上の異形と深い関係で結ばれている。「『緋文字』への序章」（Introductory to "The Scarlet Letter"）という副題のついた「税関」（The Custom-House）は，『緋文字』という作品を形作っている重要な一部であることは確かであるが，と同時に，『緋文字』の読者を惑わし，混乱させる一要因ともなっている。これは第1章の前におかれ，ページ数は，43を数える。わずか2ページの第1章は例外として，10ページ前後，少なくて7ページとなっている他の章と比べると，これは長い。この不均衡が読者を悩ます。読者の多くは，なんらかの理由で，一度は読まないで終る。作品の初めに置かれているにもかかわらず，自伝的な説明が多く記されていることと，『緋文字』のストーリーそのものを知りたいという理由で，あとに回して読むこともあるかもしれない。[4] いずれにしても，このように読者が判断せざるをえないところに，「税関」がもつ形式上の特異性が示されている。

連邦政府の政権の交代によってセイレム税関を追われた事実からして，恨みつらみも交えた作品制作の発端を説明しているのがホーソーンその人であると信ずるのは困難ではない。しかし，第1章から始まるストーリーに顔を出す語り手と同一視するとなると，読者は，とまどいを感じざるをえないだろう。書き手は表現の上で武装することを考えれば，語り手を作者と区別することは珍しいわけではないので，「税関」の語りが作者の真情吐露だけではないと言うことは許されようが，ストーリーの語り手と同じ人格かとなると，また別の問題であって，改めて作品の構成が問題になる。技法上の問題として考えることもできないことはないが，ここでは，どう作者が意図したかについては捨象したい。指摘したい点は，すなわち，この作品には，均衡を保とうとする力，充分に言い切ってしまうのを抑制しようとする感情があって，これが断定的に読

Hosei University Repository

者を舞台に導かないための一つの障壁をなしていることである。

1849年あるいは1850年当時の現実の姿を隠蔽し，しかもなお，現実の姿を伝えたいという矛盾をかかえて，なんらかの工夫をしなければならない。ドラマに衣を着せ，さらに全体を包まなければならない。あるいはまた，緩衝地帯が必要だ。「税関」はこのようなものとして，ドラマと読者の間に入り込んでくる。[5] よく知られる曖昧性と両義性が，この作品でも発揮される。しかし，表面的にそう映るだけのことで，抑制力に支配されたサスペンスの状態というのが，結果として提示されている実体なのである。[6]

抑制する力は，『緋文字』の外でも説明される。よく知られている『七破風の家』（*The House of the Seven Gables*）の「序文」（Preface）が書かれたのは，『緋文字』出版から1年以内のことである。『緋文字』初版本のとびらには，THE SCARLET LETTER, A ROMANCE と印刷されていることから推測できるように，[7] この「序文」におけるロマンスの定義，すなわち，より大きな選択と創造性を作者に与えるロマンス作家の定義は，時間をさかのぼって現実に作品の構築の中で発揮されている。[8]

作品のもつ構成的緊張関係を次のように整理することもできるだろう。すなわち，第一に，登場人物が語り行動するドラマがある。第二に，筋を進める潤滑油とでもいうべき語りがあり，語り手が存在する。この二つが作品の核を作っている。この作品は，これだけでは完結しない。この核を覆う「税関」という別の要素が入っている。さらに，もう一つ，ロマンスを定義する『七破風の家』の「序文」の文章が入る。

（3）

この作品のテーマは何かという命題は，これまで多くの研究者を魅了し続けてきた。その多くの者がモラルの問題に拘泥してきたことは否めない。[9] モラルはいたるところにあり，作品の内と外との区別を越えて論じることが可能であるので，作品と作者と素材が同一線上で論じられても不自然ではないように錯覚する。ここに混乱が始まる。共通の基盤がないところに，概念だけが飛び交う。

ホーソーン研究家は多かれ少なかれ，一種のいらだちを共有している。ある研究家は次のように言う。

Hosei University Repository

Just as America has been a significantly different nation in 1860, 1900, 1930, 1960, and 1990—with different dispositions toward economic possibility, the place of hieratic art in the culture, the opportunities available to women, and the appropriateness of various forms of sexual behavior—so the deep truths that readers have consistently found within the pages of Hawthorne's works have varied.[10]

アメリカが変わるというのが真実であれば，世界が変わるというのも真実のはずで，日本が欧米に対して目を向けた歴史を考えれば，日本でホーソーンを研究するとなると，変化は二重になる。"the deep truths" が変化してきたという事実を日本の識者の立場から考えれば，事態は充分に複雑のはずである。世界が一つの文化に同化されないかぎり，この複雑さは消えることはない。テキストは変わらないが，われわれ現代人の，いや限りない未来の現代人の座標軸は変わるということになる。歴史は直線ではないはずなのに，しばしば一直線であるように感じられる。しかし，歴史を超克する意志はつねに存在する。

一つの例を挙げてみよう。

ホーソーン研究家のキャロル・ベンシック（Carol Bensick）氏は，『緋文字』のテーマは結婚（marriage）にあるとし，『クレーヴの奥方』以来の姦通小説の系譜から，とくに『アンナ・カレーニナ』と『ボヴァリー夫人』を引き合いに出して，比較考証する。氏は，チリングワース（Chillingworth）の結婚生活の回想とヘスター・プリン（Hester Prynne）との会話から，男性であるチリングワースが，結婚生活あるいは家庭生活を無意識のうちに身勝手に考えている事実を導き出す。妻の姦通（adultery）は，一人の女性についての暴露ではなくて，ある結婚生活についての暴露なのだ，ということを作品の中で論証できることを示唆する。結論はこうである。

As it is, he [Hawthorne] gives *The Scarlet Letter* the happiest ending he can; and he would clearly have given it a happier one if historical conditions—not only those of his setting but also of his literary audience—had permitted.[11]

結末の暗い描写に救いのなさを示されたように思い，出口のないようなやるせなさを感じる読者にとって，これは明るい締めくくりだ。この研究家が女性であることを考慮に入れても，かくも違った思想を見い出すことは，緻密な論考を重ねているだけに，作品理解の方法論として，示唆するものは大きい。

Hosei University Repository

「結末」で語り手が仮定に仮定を重ねて表現している理念，the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness (*SL*, p. 263) が，いかに読者の心をとらえようとも，これだけでは何のメッセージも伝えていない。語り手がちりばめる批評と批判が糸で結ばれることによって，既存概念とは違った想念が形成される。作品にちりばめられた批評と批判は1850年のものである。そこから150年はたとうとしている。その間に何があったかと問うことが，作品理解のための嗅覚を鋭くする。この150年と，作品から導き出されるであろう想念とをゲシュタルトとしてとらえることができれば，『緋文字』理解に厚みをもたらす。この作品の研究は，作品を過去の遺物としてテーブルの上に載せて解剖することではないし，歴史博物館を美化するための資料整理でもないし，また，歴史の恐怖から逃れるための工作でもない。見えにくいまま残る問題は，一般読者も含めた『緋文字』の識者は「近代」という概念の外側に出ることはできないということである。市民生活の中で生きているかぎり，現実に，そうなのである。「近代的自我」「近代的自意識」[12]を探ろうとすれば，歴史を見るだけではなくて，現在の自己を見なければならないだろう。見る方法も，見える内容も，かなり不安定なものになるだろう。創作過程を逆方向から探っていくだけではなくて，現代人の不安も投影しなければならなくなるだろう。

(4)

作品の構造にある可塑性と自我を隠蔽するように働く抑制力からすると，共同体と個という，きわめて社会性の濃いフレームをもっているにもかかわらず，『緋文字』は，既存の理想や理念を前提にして読み込んでいくよりは，未知の個我が逡巡し，生を全うするプロセスとしての思想を実行している作品と考えた場合に，読者や識者が感じる奇妙ないらだちは消えるのではないだろうか。一つの傾向で作品の意味全体を包摂することは，芸術作品に生命を与えている現代人の目を切り捨てることになるのだから。アカデミックの立場からすれば，現実を克服することを考えているのでは研究にならないという言い分もありうる。研究者自身の営為が研究の対象に混淆するのは邪道だ，と考えることもできる。そういう考えを否定するつもりはない。

Hosei University Repository

《注》

（1） 訳語については，すべて八木敏雄訳を使わせていただいた。『完訳緋文字』岩波書店（岩波文庫），1992年。

（2） "The Prison-Door" と "The Market-Place" が変則的であることは、次の書で触れられているが，あくまでも，ある枠の中で作者が意図したものとして論じられている。Lauren Berlant, *The Anatomy of National Fantasy: Hawthorne, Utopia, and Everyday Life* (Chicago: University of Chicago Press, 1991), pp. 58-63.

（3） 全般的に論じたものとしては，Michael Dunne, *Hawthorne's Narrative Strategies* (Jackson: University Press of Mississippi, 1995). Thomas R. Moore, *A Thick and Darksome Veil: The Rhetoric of Hawthorne's Sketches, Prefaces, and Essays* (Boston: Northeastern University Press, 1994).『緋文字』にかぎれば，David Van Leer, "Hester's Labyrinth: Transcendental Rhetoric in Puritan Boston" *New Essays on The Scarlet Letter*, ed. Michael J. Colacurcio (Cambridge University Press, 1985), pp. 57-100.

（4）「税関」とプロットとの関係，「税関」の語り手 "I" とプロットに顔を出す "editorial we" との関係を坂本重武氏は興味深く論じている。『ホーソーンの文学』泰文堂，昭和43年，36-46ページ。

（5）「税関」の意義を論じたものを二つ挙げておく。Claudia D. Johnson, *The Productive Tension of Hawthorne's Art* (Alabama: University of Alabama Press), pp. 46-66. A. Robert Lee, "'Like a Dream Behind Me': Hawthorne's 'The Custom-House' and *The Scarlet Letter*," *Nathaniel Hawthorne: New Critical Essays*, ed. A. Robert Lee (Vision and Barnes & Noble, 1982), pp. 48-67.

（6） 曖昧性と両義性に視点をおくことが必ずしも作品理解につながらないことを示唆するものとして，次の論文を参照。Robert Stanton, "*The Scarlet Letter* as Dialectic of Temperament and Idea," *Studies in the Novel* Vol. II, No. 4 (Winter 1970), Nathaniel Hawthorne Special Number (North Texas State University), p. 474. 曖昧性と両義性をそのままに受け止めるのではなく，逆に，書かれた当時のアメリカとヨーロッパの文化的，社会的，政治的状況を視野に入れて考えれば，作者の積極的意図を読み取る道が読者に開かれているとし，歴史のダイナミズムが作者の美学に収斂されていると見るのは，次の書である。Sacvan Bercovitch, *The Office of The Scarlet Letter* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991). この見方は『緋文字』以後と現在のアメリカを前提にして初めて大きな意味をもつ。

（7） Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, Vol. I in The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne (Ohio State University Press, 1968), inserted leaves between p. 2 and p. 3. 以下，同書の引用は，*SL* で示す。

（8）『緋文字』の技法の問題と『七破風の家』の「序文」におけるロマンス定義の関係については次の論文に詳しい。Michael Davitt Bell, "Arts of Deception: 'Romance,' and *The Scarlet Letter*" *New Essays on The Scarlet Letter*, ed. Michael J. Colacurcio (Cambridge University Press, 1985), pp. 29-56.

Hosei University Repository

(9) この点で，編者の目が通っている次の「序論」を参照。Michael J. Colacurcio, "Introduction : The Spirit and the Sign" *New Essays on The Scarlet Letter*, ed. Michael J. Colacurcio (Cambridge University Press, 1985), pp. 1-28.

(10) 前掲書，Michael Dunne, *Strategies*, p. 4. このいらだちを方法論上で鋭利に指摘している次の文章も，問題の全貌を知る上で参考になる。

My purpose in attempting, now, a rather brutal summary of the main families of interpretation will be merely to indicate the twin hazards, as I see them, that are the Scylla and Charybdis of Hawthorne criticism. On one hand lies the rock of exclusive interpretation which tries to make one reading stand out as definitive, so that the others become subordinate or misleading. On the other is the whirlpool, much more fashionable now, which makes Hawthorne so radically ambiguous that A's 'significance lies in undecidability', it 'so refuses to stand reliably for any one thing and thus draws all significance into itself that all referents disappear into the function of symbolizing' [Eric J. Sundquist, *Home as Found* (Johns Hopkins University Press, 1979), pp. 109, 113.＝引用文の中の注記（井坂）]. Between *the code*, and deconstructive indecipherability, is there a way? (Mark Kinkead-Weekes, "The Letter, the Picture, and the Mirror : Hawthorne's Framing of *The Scarlet Letter*," *Nathaniel Hawthorne : New Critical Essays*, ed. A. Robert Lee (Vision and Barnes & Noble, 1982), p. 81.

批評史においては Hester Prynne が主人公の座を奪われることがあったという点で，次も参考になる。Nina Baym, "The Significance of Plot in Hawthorne's Romances," *Ruined Eden of the Present : Hawthorne, Melville, and Poe* (*Critical Essays in Honor of Darrel Abel*), ed. G. R. Thompson and Virgil L. Lokke (West Lafayette, Indiana : Purdue University Press, 1981), pp. 49-70.

(11) Carol Bensick, "His Folly, Her Weakness : Demystified Adultery in *The Scarlet Letter*" *New Essays on The Scarlet Letter*, ed. Michael J. Colacurcio (Cambridge University Press, 1985), p. 157.

(12) これらの言葉は，「人間学的方法」と銘打つ岡田量一氏の研究書の中で，デラシネ（根なし草）の概念と並んで用いられている。『ホーソーンの短篇小説―文学・愛・実存―』北星堂書店，1996年，123-124，190-195，232ページ。